

## 座談会

# 2019年統一自治体選挙から見る 北海道の課題



(司会) 佐藤 克廣

北海学園大学  
法学部教授・  
当研究所理事長



山崎 幹根

北海道大学  
公共政策大学院教授・  
当研究所副理事長



山下 幸紀

北海道新聞社  
報道センター編集委員



山本健太郎

北海学園大学  
法学部教授

## 1 統一選前半の特徴―盛り上がりから なかつた選挙戦

**佐藤** 今日の座談会は四月に実施された統一自治体選挙の結果とこれからの北海道における自治の課題について討議したいと考えています。最初に北海道知事選挙と道議会議員選挙、札幌市長選挙と札幌市議会議員選挙が行われた前半戦から議論を進めていきます。

道知事選挙は一六年ぶりの新人同士の対決となりましたので、戦いらしい戦いになるのでは、と注目していましたが、石川ともひろ候補の得票数は、前回の道知事選で落選した佐藤のりゆき氏よりも少ない結果で終わってしまいました。最初に道知事選挙の感想からお願ひします。

### 道知事選16年ぶりの新人対決

**山崎** 一六年ぶりの新人対決でしたが、一言で表すならば、盛り上がり欠けた選挙戦だったと言えます。その理由として、第一には道政への期待と関心が低下していることが表れていたのではないのでしょうか。これを裏付けるデータとして、昨年七月に北海道新聞と北海道大学が共同で世論調査を実施したのですが、「地域再生を担うのは誰か」という質問で、「知事」と答えたのは一二％に止まり、「中央政府」と答えたのは三五％、「市町村長」は三％でした。また、「道庁の存在は」という質問に、「必要だと思うが存在感を感じない」六五％、「身近でなく市町村と比べて必要性は感じない」二三％、「影響力が大きく重要な存在」一二％でした。

こうした結果からも道庁への期待の低さが顕著であったと考えられます。もちろん、道政の問題も大きいのですが、地方政治・地方自治全体にも共通する問題を論じなければならぬと思います。実際、一九八〇年代以降、ほぼ一貫して投票率が低下しているのは事実ですから、こうした全体の傾向

と道政特有の期待・関心の低下、その両方を見ていく必要があるのではないのでしょうか。

二つ目としては多くの有権者にとって、新人同士でなじみの薄い候補者たちの争いだったことが大きかったと思います。特に石川候補の場合、出馬表明の出遅れと知名度不足で最初から勝負が決まっていた感がありました。三つ目は、札幌市長選挙が与野党相乗り型となり、投票率が低下した。こうしたことも影響し、盛り上がりには欠けたと考えています。

### 政策争点がすれ違ったままの選挙戦

**山崎** もう少し個別に見てみると、政策公約が争点とならなかった。北海道新聞の世論調査によれば、有権者の関心のある政策は社会保障と景気雇用と出ていましたが、これだけでは両者の違いとはなりません。一方、両候補者は抽象的なスローガンと個別のアイデア合戦に終始し、結果的に新人同士の人気コンテストになった、とみています。言い方を変えれば、人柄・イメージが投票の動機になり、知名度とマスコミ慣れ、若さと好印象のイメージの出し方、政策の可否判断は巧妙に回避して踏み込まないといった選挙戦術に長けていた鈴木候補に軍配があがったとも言えます。

イギリスの政治学などで一〇年以上前から指摘されているのが「ヴェイランス・ポリシー (Valence Policy)」という考え方です。訳し方は難しいのですが、大多数の有権者が重視する中核的争点を「ヴェイランス・ポリシー」といいます。例えば、

景気対策や社会保障の充実、大多数の有権者の関心が高いので、どの候補者であっても必ず主張する政策です。ところが、そうした政策が声高に訴えられても、候補者の差異が分からない、もしくは見えてこない。結果として、候補者のパーソナリティの良し悪しで決まってしまうという現象は世界的に見られますが、今回の知事選挙もこうした状況を反映していたのではないのでしょうか。

**山本** 山崎先生と重なる部分もありますが、全体を通して感じたことが論戦の中に二つほどあり、一つはすれ違いの選挙だったということが率直な感想です。鈴木さんが主に訴えていたことは政策の中身ではなく、政治手法であったように思います。例えば、自分がトップとして引つ張るとか、夕張市長として国との関係を考えて実践してきたのは自分である、というようにです。石川さんはより個別の争点をクローズアップして、J Rの路線存続、I R (統合型リゾート) の誘致といった課題を中心にして論戦を展開しようとしていたところがある。さらに、選挙戦の中盤からは介護や子育ての話はかなりされていました。

今、山崎先生からもあつたように、鈴木さんは個別の争点に深入りし、手足を縛られることを避けていましたが、二人が力点を置いた政策や主張が交わらないまま選挙戦が進んでしまったことで、結果的に有権者から見ても非常に分かりにくい選挙になったのではないのでしょうか。四年前の知事選は中央の政党間対立がそのまま投影される選挙で、脱原発が非常に大きな争点としてクローズアップ

されました。新聞の世論調査でも、次第に原発問題が最優先の課題という有権者の認識が高まり、ある意味では分かりやすい選挙になった。ところが、今回は争点がすれ違ったまま最後まで行ってしまったので、なかなか有権者の関心は高まらなかったのではと思っています。

### 高橋知事が残したイメージ先行の知事像

**山本** もう一つは、先ほど知名度やイメージの話がありましたが、そもそも道知事の仕事そのものが有権者から見ても分かりにくい。結果として、道知事に何か政策的な期待をしても、それが実現する見込みがあまりないと思ってしまう傾向があるのではないのでしょうか。これはある種、高橋道政一六年の負の遺産かもしれません。知事が何か言ったら変わる、という期待感があまり高くなかったという気がします。例えば、社会保障の問題や雇用の問題に関し、知事に何ができるのかと言われれば、社会保障に関しては市町村の権限が多く、知事ができることは少ない。加えて個別の争点についても、知事がリーダーシップをとって何か決められるかといえば、国の権限が強いものや地元の自治体の意向が重要なものがあつたりして、なかなか知事の事に直結しない。そこを有権者は敏感に感じ取っていたのではないかと。

結果として、知事はトップリーダーあるいはトップセールスの顔だ、という話になり、イメージがクローズアップされる。鈴木さんという人気があ

るキャラクターが出てきたからイメージ選挙になったというよりも、知事という仕事自体がイメージ

選挙を助長するようなポジシオンとなっていることに、うすうす有権者が気づいていたのではないのでしょうか。それが結果的にイメージ選挙のような形となり、その意味では有権者は正しくイメージ選挙をしたのかもしれないと考えています。

**佐藤** そうした傾向は、高橋知事だったからということでしょうか。それとも全国的に都道府県知事に対するイメージが変わってきたということなのでしょうか。

**山本** ここ十数年の影響は無視できないと思います。「道庁スルー」に代表されるように、道そのものに対する期待が実務的にも低下してきている。高橋知事も振り返ってみるといろいろ批判はありますが、わたしが六年前に北海道に来て驚いたことは、学生がみんな知事の名前と顔を知っていました。東京都や大阪府は別ですが、わたしの出身地である兵庫県で大学生に知事の名前を知っているか、と質問しても知らない人が多いでしょう。それだけ高橋知事は自分を上手くアピールして、トップリーダーとして売り込むことをやられたのだと思います。ある種、その副作用で知事というのはイメージを売る人ということが有権者にかなり広まったのではないのでしょうか。実務上の道の権限低下と高橋知事の歩んできた道がシンクロし、今回の選挙戦につながったような気がしています。

## 政治参加の勢いと政治組織の衰え

**山下** わたしは取材実感に近い話をしたいと思っています。まず一六年ぶりの新人対決が前回と何が違ったかという点、戦いの構図を表すキーワードが見いだしにくかったという点です。一六年前は政党の候補以外も含めて九人が乱立し、「脱政党」や「無党派」というのが時代を表す言葉として注目されました。強い現職がない選挙は、勝てるチャンスが広がるからです。ところが今回の立候補は二人にとどまり、いずれも政党が立てた候補でした。名前が挙がっていた無所属の候補は、いずれも最後に出馬を取り下げた。たった一六年ですが、政治状況が大きく変わったと感じざるを得ません。後ほどテーマとなる「なり手不足」問題とも関連しますが、政治を変えようという意識や、政治参加の勢いが急速に衰えていることを実感しました。

一方で、それでは政党が強くなったのかと言えば、地方レベルで見ると、むしろ逆です。自民も非自民も、候補の選考過程の混乱を見れば明らかです。安倍一強という政治構造の中で、与野党とも地方組織の足腰は弱っている。それに立ち向かう無党派勢力も少なくなっているのが現状です。

もう一つ、有権者にとつて、短期決戦となった影響は大きかったと思います。二人の新人候補の名前を認識し、実像を知る余裕がなかった。北海道新聞は二年前の二〇一七年一月に高橋はるみ知事の五選不出馬を報道しましたが、与野党とも昨年一二月の正式表明までそれを折り込んだ動き

は乏しかった。選挙戦は事実上、そこから始まったような形でした。

## 候補者が持つイメージのねじれ

**山下** 争点については、山崎先生、山本先生が言われたように、私もかみ合っていないかっただと思います。原発やJR、IRといった課題について、石川さんは反対姿勢を示していましたが、鈴木さんは「総合的に判断する」「道民目線で判断する」などと中立的な表現を繰り返していた。「○対×」の戦いではなく、「△対×」の戦いで、どちらかを選びにくい構図になっていました。結果的に政策による選択はなされず、知名度があつて清新的イメージの鈴木さんに票が流れた。反対派も「どうなるか分からないけど、当選後に上手いことやっしてほしい」という思いで、鈴木さんを選択した人が多かったのではないかと思います。

公開討論会を見ていると、二人ともどちらかというと優等生的で、バチバチと論争を戦わせるという雰囲気じゃない。前回の高橋はるみさんと佐藤のりゆきさんの討論が激しかったのとは対照的です。また、石川さんは反対姿勢を示してはいませんが、言い切り型じゃない。IRについては「とても賛成できる状況ではない」という言い方でしたし、JRも「廃止を前提するのではなく鉄路を活かす方向で検討する」、原発も「原子力に頼らない北海道を目指す」などと、反対の言葉は使っていませんでした。当選した後の道政運営を考え

てのことだったのでしようが、野党政治家としては迫力に欠けるころがあつたかもしれません。

さらに、二人の候補にはイメージのねじれもありました。鈴木さんは自民党の候補ではあるのですが、裸一貫で北海道に来て、夕張の財政再建に取り組む市長出身ということで、比較的にベラルな雰囲気醸し出していた。一方の石川さんは元々、小沢一郎さんの秘書だった経歴もあり、立憲民主党という政党の中では保守寄りのイメージがある。その印象のねじれが、二人を二者択一で選びにくくしたということもあつたかもしれません。

### 世論調査段階でみえていた勝敗

**山下** 鈴木さんの一六一万票対石川さんの九六万票という選挙結果は、現職と新人が戦つた時のような大差でした。両陣営からともに「鈴木さんがこんなに強いとは思わなかつた」という声が出ていたのが印象的でした。

一方で、最近では与野党ともに丁寧に世論調査を行つていきます。自民党道連執行部が最後まで鈴木さんの擁立にこだわっていたのは、事前の世論調査の結果が良いからでした。鈴木さんが出馬表明をした直後に公明党が推薦を決めたのも、独自の世論調査をしていて、鈴木さんなら勝ると踏んだからです。与党の関係者の中には「選挙が告示された時に戦いは終わっていた」と豪語する人もいました。調査型の選挙のすさまじさを感じます。

**佐藤** 今までの話を聞いていて、政治のプロた

ちがこんなに差がつくほどではないと思つていたということは、山崎先生、山本先生が指摘した通り、イメージを作る、もしくはイメージ選挙なのだということを、必ずしも政党側は認識としてもつていなかったと考えてよいのでしょうか。

**山下** 自民党は、候補の選考過程でかなりの混乱があり、国土交通省の官僚を擁立しようとする勢力が結構大きくて、鈴木さんを推す道連執行部は必ずしも多数派ではありませんでした。鈴木さんの選挙戦略について、当初から党内の共通認識があつたわけではありません。今回は政党の力で勝つたというよりも、鈴木さん個人の魅力で勝つたという印象です。政党は後からついてきたという気がします。

**山崎** 改めて鈴木さんが持つイメージの影響力の強さは、わたしも想像以上のものを感じました。  
**佐藤** 山本先生はそもそもイメージ選挙になる要素を持つていた、もしくはあつたということですね。

**山本** 選考過程も鈴木さんには二つのことが有利に働いたと思います。一つは候補者選定で与野党共に混乱がありました、主にメディアで取り上げられたのは自民党側であつて、やはり、鈴木さんに焦点が当たる比重が大きかったこと。もう一つは、自民党道議のような「サ・政治家」のお偉方に頭を踏みつけられながら出馬するという構図になり、判官びいきを助長する雰囲気も生まれたので、そういう意味では鈴木さんにとっては有利な状況が期せずして生まれていたのでないで

しょうか。

**佐藤** 確かに鈴木さんは若いし、何か変えてくれるかもしれないという部分はあるかもしれませんがね。では、道議会議員選挙についてはどのような印象を持ったのでしょうか。

### 無投票当選の増加と改革がみえない道議選

**山崎** 道議会議員選挙の前に議論となつていた道議会庁舎建て替え、道議会改革についてはおきざりにされた選挙戦であつたと思いますが、それに対する批判は具体的に出てきていません。とは言え今後、道議会が自己改革を怠ると、期待と関心はますます低下し、道民からの批判が強まる恐れはあるでしょう。

また、道議選の無投票当選増加の問題について言うと、一つは制度上の問題だと思います。一票の格差是正を行えば行うほど、地方部で一人区・小選挙区が増えていきますので、そうした要因が大きいのではないかと考えています。もう一つは、競争のコストとリスクを回避する傾向がいろいろなどころで強まっているのではないのでしょうか。これは道議選に限らず市町村議会選挙にも共通していますし、政党や団体レベル全体としても言えることですが、結局、勝ち目がない選挙を避けるという選挙自体の活力が失われていることが見えてきます。

他方で、道議選ではそうした動きと真逆な現象があり、例えば、札幌市中央区では無所属の候補がたくさん出てきている。先ほど、山本先生が言



さとう かつひろ 氏

及されたように、東京や大阪のように都市型無党派層をターゲットとした政治志向や組織型・団体動員型ではない政治を志向する人は、北海道でも一定数いるのではないかと思います。もしかすると、維新や都民ファーストと共通する要素はあるのかもしれませんが。北海道でも札幌市を中心と同様の現象が増えていくのかも含め、こうした動きをどのように評価するのが今後の課題ではないかと見ています。

### 地方議員選に影響した「野党」分裂

山本 今回、議員のなり手不足や無投票増加は全国的にも問題となりましたが、人口減少で物理的になり手がいないということ、都道府県議会議員選挙、政令指定都市の市議会議員選挙のように報酬がそれなりに高くて、浮動票も見込めるような地域での無投票問題とは分けて考える必要があると思います。



やまざき みきね 氏

後者の都市部や都道府県議会議員選挙で無投票が増えたのは単純に政党の問題です。中央における野党の分裂で、特に北海道は大きな影響があった。野党分裂によって、なかなか候補者を擁立するところまでいかない。例えば一人区で候補者を立てて勝つには候補者の一本化が必要ですが、野党分裂のために候補者が立てられないという事態を招いてしまっている。

一方、中選挙区では現職優先で、候補者を積極的に擁立するというインセンティブがもともと乏しい。そうした状況下で政党の基盤、特に野党が弱ったことで、候補者不足に陥って無投票が増えていく悪循環になった。その帰結が道議会の自民党単独過半数という結果だと思います。言い換えれば、自民党がそれだけ勝てるということ、ほかの政党の候補がそれだけ少なかったということになります。そういう意味では政党の要因が大きかったと考えています。

山下 わたしも政党に焦点を当てて考えてみた

と思います。今回の道議選は、一六年ぶりに新人同士の知事選とセットで行われる選挙でした。つまり、野党としては道政を奪還するチャンスがあった。それにもかかわらず、野党は最初から、道議選で過半数の五一議席に満たない人数しか候補を立てていないのです。もし石川さんが知事選で勝っていたら、少数与党の苦しい議会運営を強いられていたはずですが、本当に勝つ気があったのか、と言われても仕方がないと思います。

今回、自民党が道議会で単独過半数を占めたことは大きな意味がありますし、道政運営にさまざまな影響が出てくるでしょう。選挙後、自民党派は一時、圧勝の勢いにかけて正・副議長の両方をとる姿勢を見せ、最終的には自重し、副議長は第二会派の民主・道民連合から出すことに収まりました。しかし、野党が消極姿勢をとっている限り、この力関係の傾向はますます強まり、野党は守りの選挙を繰り返すのではないのでしょうか。

先ほど、政党の地方組織が弱まっていると話しましたが、道内は自民党もかつての町村信孝さん、中川昭一さん、武部勤さんといった実力者が牛耳っていた時代からは大きく意思決定過程が変わりました。立憲などの旧民主党側も横路孝弘さん、鳩山由紀夫さんが去ったあと、だれが主軸になるのか見えません。こうしたことが党の地方組織の弱体化に影響していると思いますし、自民、立憲ともまだ過渡期にあるのだと思います。

佐藤 知事選挙と連動して道議会議員選挙も行われますから、鈴木さんの人気がある以上、自民

党の道議会議員は鈴木さんの恩恵を受けることになると思いますが、その点はどうなのでしょう。

**山下** 鈴木さんのイメージが道議会議員選挙に影響したかと言われるば、若干はあったのかなと思います。鈴木さんは街頭演説するだけで女性たちが集まってきて、握手を求めたり、「写真を一緒に撮ってください」と頼まれたりして、なかなかの人気ぶりでした。自民党道議の大半は、候補の選考過程で「鈴木さんはダメだ」と言っていたのに、知事候補に決まったとたん「なかなかいい候補だ」と評価ががらりと変えて連携しています。知事選と道議選の連動は比較的うまくいっていたのではないのでしょうか。

**佐藤** 道議会議員選挙について言うと、道の存在感がだいぶ薄れているところでの選挙戦だった。知事選挙では国政野党が一緒になりましたが、政党も特に国政野党側が分裂してしまったこともあり、見た目の印象からも野党側は分裂しているイメージが有権者側には結構あったのかもしれない。



やました こうき 氏

ん。そうしたことが国政野党の衰退につながっていったのですが、結局、今回は自民党が勝ったのでしょうか、それとも野党が負けたのでしょうか。

**山下** 自民党が何か新しいことをやったという印象はないので、わたしは戦う前に野党はある程度負けていたのではないかと思います。

**山崎** わたしもそう思います。力が弱くなっていないのではないのでしょうか。

**佐藤** 知事選挙の場合は、かなり早い段階で鈴木さんが当選すると分かったと思いますが、山本先生は道議会でも自民党が過半数の議席を取ることを予想していましたか。

**山本** 予想はしていませんでしたが、不戦勝に近いと思います。そもそも野党は候補者が少ない状況になっていましたので、自民党はどう戦っても負けることはなかったと考えています。

**佐藤** 道政のゆくえについてはあとでまとめることにして、次に札幌市長選挙について話をすすめます。山崎さんはどんな感想をお持ちですか。



やまもと けんたろう 氏

## 主要政党相乗りの札幌市長選挙 秋元市政に対する批判票の評価

**山崎** 現職秋元克広市長への主要政党相乗り型選挙で、投票率は低下しました。予想外の市政への批判として出てきた共産党推薦の渡辺達生候補に票が集まったことは唯一の見物だったと思います。逆に言うと、顔の見えない秋元市政を象徴していたのかなとも感じられた選挙でした。

**山本** 失礼な言い方もありませんが、渡辺さんは決して政治家慣れしている人ではありません。演説はたどたどしく、この人は大丈夫かな、と思ってしまうような人でした。そういう人が三割以上票を取ったことが、秋元さんに対する批判の強さの現れだと理解することができると思います。秋元さんは就任後全方位外交を進めてきて、当選時の選挙事務所を見ても、LGBTの方が来ていたりして、決して保守・自民党よりではない姿勢を見せつつ、挨拶をしているのは後援会共同代表のスーパーアークス会長でした。全方位外交なので誰にもそんなに嫌われないけども、誰にもそれほど好かれなれないという二面性を持っていたのではないのでしょうか。

**佐藤** よくも悪くも行政マンということなのでしよう。予想外の批判とありますが、どうせ秋元さんは当選するだろうと考えている人も多かったので、積極的な批判ではなく、お灸をすえるような消極的な批判票もあったと思うのですが。

山下 北海道新聞の出口調査では、無党派層の四割近くが渡辺さんに投票し、実際の得票率よりも多い数字でした。せっかく投票で評価する機会を得たのだから、秋元さんを少し懲らしめてやろうという意識の投票も多かったのではないのでしょうか。全面的に支持しているわけではないよ、と。今回の相乗りで選択肢を奪われたことを含め、有権者の不満のようなものが渡辺さんに流れたこともあったのだと思います。

佐藤 そうだとすれば、自民党系の有権者は投票しないとして、旧民主系の有権者はどう投票したのでしょうか。

山下 秋元さんの一期目は、立憲民主などの旧民主系が推して与党となりましたが、出口調査で見ると今回、立憲支持層で秋元さんに投票したのは六三%、国民民主支持層では五八%、自民党支持層では八一%、公明支持層は八二%。どちらかと言うと、自民、公明ががちり応援して、立憲などは相乗りにしらけたのか、離れたという結果になっています。

### 西区で札幌市議会初の無投票

佐藤 札幌市議会議員選挙は自民党が過半数を取れませんでした。

山崎 今回、札幌市西区で無投票となりました。わたしが札幌市議選を振り返って感じたのは市民ネットについてです。市民ネットワークは一九九〇年に設立された団体で、多いときは三名の札幌

市議がいた時期もあり、勢力を伸ばして一つの政治的影響力を持つ団体になるのかな、と期待していましたが、市議会議員は一人に止まりました。

市民ネットは生活クラブ生協が母体となつていますが、実は生活クラブの活動自体も伸び悩んでいるようです。その理由は共働きの夫婦が増えて、生協運動に積極的に参加できるような主婦の層が少なくなつてきていると昨年、東京の関係者から伺いました。今回の札幌市議会議員選挙でも市民ネットが西区候補者を立てられなかった背景として、社会経済の変化がこういうところにも影響しているのかと感じました。

佐藤 市民ネットは女性候補者しか出さないの、女性の立場を代弁するようにみえます。女性の社会進出を背景にむしろ得票が増えるというイメージを持つていましたが、逆に昔ながらの専業主婦イメージを引きずっているということなのでしょう。

### 札幌市議選挙区一万票の壁

山崎 それよりも選挙に出る、候補者を当選させる運動にはものすごい労力とエネルギー、そして時間がかかります。そうした戦う力が経済的に厳しくなると、弱くなるという状況が現れたのではないのでしょうか。こうした傾向は、既成政党でも市民ネットその母体となる生活クラブ生協でも共通して出てきているのかもしれない。

山本 札幌市議会議員選挙は典型的な中選挙区選挙なので、政党間議席構成が変わりにくいことが構造的にもあり、正にその結果だったのかなと思います。自民党は他の政党と比べ、政党支持率も高いので、もつと候補者を出そうと思えば出せるのですが出さない。自民党も組織ありきというよりは、市議個人の集まりなので、党勢をさらに伸ばすため候補者を擁立しようとはならない。やはり、中選挙区での選挙自体が有権者の関心を削いでいるという問題があるのだと思います。

確かに、西区無投票はかなりの衝撃でしたが、他方、中央区では無所属や浮動票狙いの候補者も出ていた。しかし、獲得票数を見てみると一萬票の壁というなかなか厚い壁がある。実際、全く何のバックボーンもない中で一萬票を取るのには難しいでしょう。だからこそ、政党がしつかりしなければならぬのですが、そのような選挙制度ではないこともあり、行き詰まりを感じる選挙だったと思います。

佐藤 区によっては一萬票を若干下回るところもありますが、確かに難しいかもしれません。

山下 もともと大都市の札幌市民にとって、市議会はかなり距離感があり、身近な存在とは言い難い。道議選ではすでに札幌市内で無投票の選挙区がいくつかあり、今回の西区の無投票も、いよいよ市議選にまで来たか、という印象です。やはり、市議会議員の活動が見えず、議員という職業そのものに魅力を感じないことが関心の薄れに影響しているのだと思います。

## 2 後半戦―自治体間格差が浮き彫りとなった選挙戦

**佐藤** ここからは後半の四月二二日投票の市町村長と議員選挙について話をすすめていきます。首長でも無投票があり、市町村議会議員選挙では首長選以上に無投票となった地域もありますが、後半の結果について、どのような感想をお持ちでしょうか。

### 首長のやりがいと無投票の相関性 一方で見えてきた選挙になった構図

**山崎** 無投票が増えていることは改めて論じなければなりません。が、わたしが感じていることは、近年、首長のやりがいが見えづらいということ。特に小さな町村になると人口減や財政難で独自政策を行う余地は少なくなっています。また、全体的に見ても地方自治体での不祥事・不手際が散見されますし、地方創生のように地域間競争がますます高まっていることも影響として挙げられると思います。

一方、首長選挙においては、現職首長の圧倒的権力と知名度が当選回数を増すことで強化される状況が、厳然として存在しています。それ以外にも、立候補するコストとリスクが高いということも考えられます。落選後の生活を考えれば、人口

規模の少ない自治体ではなかなか大変ではないでしょうか。

そうした中で、例えば、長らく無投票無風選挙が続いていた乙部町、美瑛町、鹿追町、美幌町では現職の引退によって選挙戦となったことは今回、目立った点です。一方、現職首長の自治体運営に対する批判というのが明瞭なたちで表れた自治体があったことも興味深かった。実際、赤平市、中川町、壮瞥町では現職が落選していますし、統一選ではありませんが、倶知安町や知内町でも一期目の町長が落選しています。さらに江別市、室蘭市、下川町では現職が当選したものの、思った以上の批判票が集まった。

個別の事情を見る必要がありますが、大多数で無風選挙がありつつも、当選回数の浅い現職首長が落選するという二極化が見られたこと。さらには自治体運営に対する批判が明瞭な形で顕在化すると対立の構図ができあがり、選挙になることが今回、明らかになったのではないのでしょうか。

### 地方議会の二極化と候補者増

**山崎** 地方議会について言えば、行動する議会と現状維持議会の二極化があらわれました。長期

的流れの中で、地方議会に対する住民の期待・関心が低下しているのは間違いない。議員と議会が意欲を示す、あるいは理解される議会の活動を示していかなければ、住民から議会は何をやっているのか分からないと言われますし、役割を実感できないので定数を減らせという議論に繋がっていきます。

長期的な動向としては、議員の役割の変化が挙げられます。先ほど紹介した道新と北大の世論調査では、議員は地域や団体の要望を伝える媒介者としての役割が現在でも議員の主たる役割として挙げられてはいますが、インフラが整備されたり、行政サービスが向上したり、さらに行政側も地域担当職員制度や住民参加制度が充実してきます。そうになると、議員さんがいなくても自分たちの要求・要望を行政に伝えることが容易となり、そうしたことから議員としてのやりがいは見えにくくなっていく。

さらに、人口減少と地域経済の活力低下によって、候補者を擁立できる地域や団体が少なくなっています。一昔前であれば地域の代表としての役割もありましたが、そうではなくなり、さらに業界団体も選挙を戦う力がどんどん低下しているのは、市町村に限らず、各種選挙に共通しているところではないでしょうか。

ところで、帯広市議会選挙では候補者が大幅に増えました。それ以外にも留寿都村、美瑛町、泊村で議員候補者が大幅増となっています。帯広市に関して言えば、情報公開とか住民対話などの議

会改革を議会レベルで実直に行っていましたので、そうしたことが影響したのかもしれない。留寿都村では、否決されましたが村長不信任案

が出されたり、決算が不認定となるなど、議会の活動が外から見えていた。美瑛町では「美瑛町に放射性物質等を持ち込ませない条例」を議員提出で成立させています。いずれも定数削減に加え、議会活動を通じて存在感を示していたことが要因のひとつにあつたのではないかと観察しています。

さらに前回は無投票でしたが、二五歳の新人議員が当選した浦幌町議会やわたしも関わっている斜里町議会は今回定数を減らしたこともあり、議会モニターだった方が二名当選しています。議会改革を継続的に進めている芽室町も今回の選挙で新人が当選している。こうしたことから、行動する議会と現状維持の二極化が全体的に見て対照的に表れていたことが非常に面白い後半戦だったと思います。

### 連続する選挙に疲れた有権者

山本 前半とも関係しますが、投票率のことで。北海道に住んで改めて思うのは、前半と後半の二回選挙は少々重いという印象です。新人対決の知事選でも投票率が上がらない理由のひとつとして、安倍政権になって以降、国政選挙がほぼ毎年行われています。有権者から見るとすべてが同じ選挙ですから、あまりにも多くなりすぎていて、だんだん煩わしくなってきましたし、争点も分かり

にくくなっています。

そして、今回は東京知事選が統一地方選から外れて、東京と私たちがいる北海道では温度差があつたと思います。ただし、大阪は別です。東京の私たちは統一地方選と言われても、そんなに大きな選挙ではないという感覚なので、全国的にも関心がどうだったのかは気になっているところです。投票率が下がっているということは地方選挙の意義そのものもありますが、やはり、前半と後半に分けないほうがよいと改めて感じました。

### 議員のなり手不足問題

#### 地方議会は踏みとどまったのか

山本 もう一つは、山崎先生も指摘されましたが、地方議会のなり手不足問題については比較的踏みとどまったのではないかと印象を持っています。ただ、前向きに踏みとどまったところはそれほど多くなく、定数削減を行った結果、ぎりぎり無投票を回避するところがたくさんあつたと言わざるを得ません。

また、浦幌町議会のような報酬増など、なり手不足解消の取り組みも一定の効果を持つたと思います。しかしながら、これには限界があつて、定数は削っていくといずれゼロになってしまいますので、どこかで定数減は止めなければなりませんし、現実的に報酬増も限界があります。四年先、あるいは八年先の統一地方選を見越したときに、今回のようなやり方で乗り切るのは難しいので

はないでしょうか。弥縫策ではなく、何らかの私たちで地方議会の役割を見直す機会や改革は急務であると感じています。

佐藤 山本先生の前半と後半をまとめるということは、みんな札幌市のようにするというです。むしろ、どの選挙か分からなくなるリスクも考えられませんか。

山本 もちろん、そのリスクも考えられます。ただ、前後半で分けて、後半戦で一生懸命に候補者を選んでいかと問われれば、もちろん、きちんと選ぶ人もいます。むしろ、実際のところはそうではないと思います。むしろ、投票にかかるところを下げる方法で考えた方が有権者にはやさしいのではないのでしょうか。

佐藤 また投票に行くの、というよりは一緒にやったほうがいいということですね。

山本 この一月月、ずっと選挙をやっている、街中もずっとにぎやかですが、生産的ではないかなと考えています。

佐藤 そうなると、運動期間が違いますよね。

告示日が違うので、期日前投票に行こうとすると、バラバラになってしまいますね。

山本 今回は、一八歳選挙権の絡みと改元の関係で通常よりも一週間前倒しとなり、告示日が住民票異動の多い四月一日を挟むようになっていました。そこへもってきて知事選と市長選と議会選挙と選挙期間が異なることから、選挙管理委員会が混乱してしまい、投票でミスが散見されました。誰もまじめに考えなかったことが問題の原因だと

思いますが、投票事務の観点から無理のない方法や有権者への周知方法の改善など、まじめに考えなければならぬ課題は少なくないと思います。

### 無投票にする議会機能低下の危惧

**山下** 最近の統一地方選挙は、無投票の市町村が何カ所に上るかがニュースのポイントになりますが今回、無投票の議会が多いのは、それはそれでももちろん大きなニュースだけでも、その中でもさらに定数割れとなったり、欠員を補うための再選挙になったりするマチがあるのではないかということに注目が集まりました。より状況は厳しくなっているわけです。再選挙は、議員定数の六分の一を超す欠員が出た場合に行わなければならず、過去道内ではその事例はありません。

結局今回、そうした自治体はありませんでしたが、告示日当日はそれぞれのマチでさまざまなドラマがあったと聞いています。羅臼町では告示日の朝の段階で候補が定数に満たないと聞いた八九歳の元町議が昼前につえをつけて役場に届け出に現れ、定数割れを防いだと言います。

議員の無投票が繰り返されると、まず定数を満たすことが目的となり、議会のチェック機能や議論の力がおろそかになってしまうのでは、という懸念も強い。道内各地に取材現場を持つ新聞社に身を置くものとしては、地域ごとの危機感を聞く機会も増えています。

一方で、先ほどの話で出た十勝のように、芽室

や浦幌など各地の議会改革の取り組みが近くのマチにも刺激を与えて、それぞれが活性化していく例もあります。定数二九に四二人が出馬した帯広市議選では「当選ラインが下がる」とみて、出馬を決断した人もいたようだと聞きます。今後いい意味での好循環ができることに期待したいと思っています。

### 道庁OBの市町村長が増加傾向に

**山下** もう一つ、首長のなり手不足問題で、最近の傾向として気になるのは、道庁出身の首長が増えてきていることです。今回の統一選では、京極町で元道幹部が無投票で初当選しました。一九九〇年代後半には、道庁出身の首長が二〇人近くいました。

当時は、まだ道庁にカネや権限があり「道とのパイプ」が重視された時代です。「利益誘導を期待している」という批判的ならえ方もありました。ところが、最近は少し傾向が違います。人材不足に苦しむ中で、行政経験があつて、地元にくか

りのある人に来てもらいたいという例が増えていく。道庁スルーという言葉もあり、道庁の力は弱まっています。そんな中で、むしろ、道庁が市町村首長の人材供給の役割を担うようになってきている。正確に数えていませんが、京極町長の当選で道出身首長は六名ほどになったはず。明らかに増える傾向にあり、新しい動きだと感じています。

**佐藤** 山下さんの話を聞いて、昔は地域の中で争いごとがあつて、こちらを立てると、こちらが立ず、一方が当選すると骨肉の争いとなつてまうので、では、道庁から来てもらうということも結構ありました。今の人材供給は、かつての傾向とは違うのでしょうか。

**山下** 肯定的に捉えるべきか否かは、これから詳細な検証が必要ですが、首長のなり手不足のなかで、最後の頼み綱のようなかたちで道庁へお願いに来ることがあると聞きます。かつてとは違つかたちで道庁出身OBが増えているのではないのでしょうか。

## 3 北海道の課題解決に向けて

**佐藤** ここからは前半・後半の選挙を踏まえて、北海道の課題を解決する上で選挙がどれだけ役立つのかも含め、議論をすすめます。先ほど、知事選、道議選では政党の力不足が指摘されましたが、これはどのように捉えたらよいのでしょうか。中

央集権化が進んでいて、中央政党のイメージが自治体選挙でも強く表れてくる。あるいは安倍一強のなかで、自民党自体も政党の力が弱まっていることがあるのかどうか。自民党総裁選では地方議員も投票できる仕組みがあるので、必ずしも地方

組織が弱くならないのではないかと考えてしまうのですが。

## 変化を求めつつ現状維持を選んだ有権者

**山崎** 今回の知事選は鈴木候補の勝利に終わりましたが、これは道民が変化を求めている期待の第一歩でありながら、他方で国との協調路線を受け入れていたとも考えられます。投票日の前日に菅官房長官が応援演説に来札しました。安倍政権の負の象徴にもなりえたのですが、反対に「令和おじさん」としての人気をいかに示したことが非常に象徴的でした。確かに、地方選挙は自治体の争点での選挙であり、国政争点の評価を持ち込むべきではないという意見もありますが、安倍政権のイメージは少なくとも不利には影響しなかった。

一方、石川さんの北海道独立宣言は浸透しませんでした。見方を変えれば、道民は現状維持、対中央政府との関係で言えば批判や不満が少なくとも顕在化しなかったということです。現状に対する危機感が共有されなかった。いろいろな世論調査を見ても、確かにIIR、JR、原発問題で政策関心がどこまで候補選択に強い影響を及ぼしたのかといえ、それほど強く作用していません。たかといえます。その中で、デニー玉城沖繩県知事と呼び、応援演説をしたことが石川陣営の特徴でした。恐らく、沖繩型の選挙戦の構図を作ろうとしたのではないかと思いますが、戦術は成功し

なかった。それは名護市辺野古沖の基地建設のような中央対地方の対決構図が、現時点で北海道には当てはまっていなかったということだと思いません。

## 道政の課題と新知事の課題

**山崎** 道政に関して言えば、一つは道庁組織の活性化が新知事の下でできるのか注目しています。鈴木さんは選挙戦で夕張市での実践に基づいた手法を訴えて進めていきましたが、これから道庁組織、道職員の意欲を引き出していくのをどのようにやっていくのか。特に中堅・若手職員がどれだけ前向きに仕事ができるのか。あるいは各振興局をどうやって活性化させるのかを考えれば、今後の人事と予算は注目です。

一方で、きびしい道財政の状況は変わりませんから、予算を伴う斬新な政策は限られます。その中で組織をどう活性化していくかも見えていく必要があります。また、道庁が市町村との連携をどれだけやっていけるのかも注目しています。北海道全体で言えば、札幌一極集中をどうやって是正していくのかについても注視していかなければなりません。

**山本** 北海道の課題というよりも、鈴木知事の課題というべきかもしれませんが、知事候補になる過程で、市町村長、自民党道議の大半が鈴木さんを積極的に推さなかったという事実があります。それを踏まえた上で道政運営を行わなければなり

ませんので、議会、市町村との調整は苦勞されるでしょう。加えて、道庁の中も味方らしい味方がないと聞いています。

つまり、三重の厳しい条件に直面している中で、独自色を出さなければなりません。そうなる、鈴木さんの権力の作り方として大事になるのは世論の支持だと思います。そこがなくなってしまうと、すべて言うことを聞かなければなりませんので、何もできなくなってしまう。どうやって世論を味方につけるかを考えれば、副知事を三人とも入れ替えます、官僚出身者を入れて身近なところに味方を作るといやり方は、常道なのではないかと思えます。

選挙戦のプロセスで、鈴木さんの評価は交錯していたと思います。イメージだけだという人と、意外としたたかな人だという人に分かれていたように思うのですが、個人的には腹黒いところがあるやんとあるなという印象を持っています。

それは道新の記者の方と一緒に街頭演説を聞いた時に感じたのですが、場所によって演説のスタイルが大きく異なりました。当日は公明党の山口代表が来道されていたので、公明党の支持者が多数のところでは政策の話は一切せず、「真つすぐな道、直道」としか話さない。演説も五分ほどで終了し、放っておいても票を入れてくれる人にはそれなりの対応をしていました。その後、新党大地の鈴木代表と歌手の松山千春さんが来て札幌駅前演説するときは、割と丁寧な政策の話をし、対応に差がでていた。鈴木さんは普段、非常にに

こやかに対応する方ですが、状況に合わせて対応をされる人でもありますので、今後もご自身のいいイメージを活かして世論を惹きつけながら、三重の敵に対してどう立ち向かっていくのか、そこに注目です。

### 統一選から見た国政野党の方向性

**山本** 二つ目はわたしの専門でもある政党です。やはり、野党のなかにもある種の分断状況があつて、知事選に限らず、さまざまな統一地方選の局面に大きな影響を与えたわけですが、加えて与野党の分断もいろいろなところで深刻化していると感じています。要は野党に政権を取るつもりがなくなつて、野党は野党、与党は与党という役割が固定化されてしまつている状況がある。

民主党も功罪はいろいろありますが、中央組織が地方組織をある種引つ張つているという構図がありました。中央で存在感を高めて政権を取つていく手法の一つとして、地方でも積極的に候補者を立てて知事を取りに行こう、市長を取りに行こうということは民主党が政権を取る直前までやっていました。それはある意味、地方政治を活性化させた部分があつたと思うのですが、今はそういうところは全くなくなつて、とても地方に目を向けている余裕はないという状況です。

では何をしているのかと言えば、官僚を呼びつけて高圧的なヒアリングをやつたりしている。本当に政権を取るつもりであれば、官僚は部下にな

るかもしれませんので、あのようなことはやらなはずで、政権取る気がないことが明らかです。

つまり、政権を取るつもりがないので、地方を大事にしないという話になつてしまつている。参議院選挙はもしかすると衆議院選挙とのダブル選挙になるかもしれません。わたしはここが野党の岐路だと思つています。本当に政権を取るつもりがあるのかないのか。取るつもりはない、では困るのですが、取るつもりで立て直さなければ、北海道に限らず地方の政治は活性化しませんし、候補者が増えず選択肢が有権者に示されない選挙がこれからどんどん続いていってしまうという懸念を持っています。もう一度、中央で立て直して政権を取るために野党は何をすべきか。そろそろ真剣に取り組まないと手遅れになつてしまつて考えています。

**佐藤** 時代は違いますが、昔の社会党は政権を取るつもりはなく、せいぜい、憲法改正させないような議席を確保していればいいという考えだと言われていました。ところが、ある時期から地方にも手を入れて、一九六〇年代の革新自治体と呼ばれたころは、選挙制度の関係で中央では絶対に取れないからこそ地方に力を入れていたと見ることもできます。

今の話を聞いてみると役割の固定化、つまりは五五年体制回帰という懐かしい気持ちになりました。とは言え、日本会議などの右派系は地方から盛り上げていますよね。野党はそういう動きを真似するつもりはないのでしょうか。

**山本** そういう意味では、社会党は地方で頑張ることを活力としていましたが、今の国政野党はあまりそういう感じは受けません。民主党の延長線上にあつて、中央ありきなんだと思います。しかしながら、中央ありきの割にはあまり展望がない戦略を取つているように見えます。

**佐藤** それは、中央で取ろうとする戦略そのものが無くなつてしまつている、と考えてよいのでしょうか。

**山本** 少なくとも政権を取つて、局面を打開するということを考えているには見えないので、そこは地方に悪い影響を与えなければよいとは思っています。

**佐藤** 本人たちの意識は別として、客観的な戦略としてみると国政野党に政権は取れそうにないということですね。かといつて、自治体選挙に力を入れて捲土重来を図るつもりもない。

### 中央と地方の政党の温度差

**山本** 北海道は古くから革新勢力が強くて、全国とは違う構造にあると言われてきました。しかしながら今回は、権力の中枢である首相官邸の影というか、菅官房長官がバックにいると言われる候補が圧勝した。安倍一強時代と政党の地方組織の弱体化という視点で言えば、北海道でもそうした流れが強まつていると感じました。

鈴木さんの主張で興味深かったのは「官邸のかいらいの道政になる」という批判に対し、むしろ

開き直って「国に頼らないという人もいますが、それでいいんですか」と反論し、あえて国との関係を強調するような演説を繰り返したことです。公共事業が華やかになりしころ、国とのパイプを強調して利益誘導をおこなうことが政治家のアピールポイントになる時代がありました。次第に批判されてマイナスイメージになっていきました。

利益誘導と同列に論じては失礼だとは思いますが、国との関係が強いことがアピールポイントとなるというのは、何か時代が一回転したというか、変わり目の選挙だったと感じます。

強い自民党と地方選挙という関係で言うと、今回の全国の知事選を見ても「与野党対決」という構図より、自民党同士が分裂して激戦となる例が増えてきている。各地で野党が弱くなっていることのが表れです。今回の道知事選は、一六年ぶりに道政奪還の機会があったのに、石川さんにいたる前の当初の候補選考では、逢坂さん、鉢呂さんという一六年前の知事選と全く同じ名前しか挙がりませんでした。

先ほど山本先生も指摘されたように、立憲民主は、人材不足という党内事情もあるのでしょうか、地方発で新しい動きをつくるというか、地方から国全体を変えていくという発想が乏しいのかもありません。逢坂さんに関して言えば、枝野さんは当初から知事選出馬に否定的で、最終的に知事選に出ないと分かった後、党の政調会長に据えまされた。少し前であれば、各地の改革派首長が全国的なスタンダードをつくって、時代を変えるような

影響力を持っていましたが、今は首長を取ったからと言って、党勢拡大につながらないという損得勘定もあったのかなとも感じます。

### どんなピンチをチャンスに変えるのか

山下 鈴木さんは選挙中、一貫して高い人気を保っていました。が、「ピンチをチャンスに変える」というキャッチフレーズからは、実際、何をやりたいたいのかが見えてこない。もつと言えば「ピンチ」とは何を差すのか、一体、何を課題設定しようとしているのかが分かりません。

ピンチをチャンスにと言えば、堀達也元知事を思い出します。不正経理や農業土木談合などの不祥事が相次いで任期中はピンチだらけでしたが、それを改革のバネにした。入札のランダムカットなど定着しないものもありましたが、「時のアセス」など、とにかく全国初の挑戦がありました。当時は「このままでは道政がダメになる」という強い危機感があった。鈴木さんは何に危機意識を持っていいのか、注目しています。

もう一つの注目点は、初めての市町村長出身の道知事だということです。高橋道政では、道庁スルーの言葉に代表されるように、道が市町村の抱える深刻な課題にコミットできていないという指摘がありました。首長出身の道知事として何をやるのか、そこは期待感を含めて見ていきたいと思えます。鈴木さんは夕張市長時代、国との強いパイプを持って道に頼り切らない、ある意味で、道

庁スルーの象徴的な首長でした。一方で、財政再生団体の夕張市には多くの道職員が派遣されており、市職員と道職員が一緒になって働く意味も強く感じていると思われ。今後はさまざまな化学変化があるのではないのでしょうか。

最近の道庁は、広域自治体として何をすべきか、存在意義は何なのか、迷い続けているように感じます。JR北海道の路線見直し問題は象徴的で、道の幹部はよく「道にはJRへの監督権限ないから限界がある」と言いますが、これほど個別の自治体では対処しにくく、広域自治体の手腕に期待がかかるテーマはありません。鈴木さんがこうした課題に、どう向き合っていくかも注目しています。

### 見えない鈴木知事の方向性

佐藤 鈴木知事は選挙のときから国との関係を強調し、副知事の一人は国の官僚から登用する方向でと推測されています。知事選の候補者を巡って取り沙汰された相手は国交省の北海道局長でした。出馬宣言をしたとき、そこで何らかの手打ちをしたのではないかと勘ぐってしまっています。

わたし自身、北海道は二級府県のような扱いだと思っています。なぜなら、他の県知事が有している国道や一級河川管理の権限が北海道知事には無いからです。そうした現実を考えると、国との関係、北海道局との関係がぎくしゃくするとまずい、と彼は考えているのではないのでしょうか。その点、山崎先生はどうお考えですか。

**山崎** 国との関係でいえば、協調を基調とした現状維持路線で臨んでゆくのではないのでしょうか。財政再生団体としてやれることは限られたなかで、立ち振る舞わなければならなかった市長と、財源の余裕はないですが、いろいろな調整であるとか、知事としてやれる余地もあるのはこれまでと違います。そこはどのようにやっていくのか。今のところは見えてきません。

あり得るのは、他の府県でも新しい知事が出てきたときによくあるような地元産品のPR活動、積極的なメディアへの登場で存在感をアピールする方法です。ちよつと古い例ですが、東国原英夫前宮崎県知事のように、最初は地場産品のトップセールスマンとして立ち振る舞っていたのではないのでしょうか。

別な観点で言えば、三六年前に横路孝弘氏が知事になったとき、最初にやろうとしたのは道産品PR、企業誘致、一村一品運動、さらには職員の意識改革を一期目で進めました。そうしたことを最初にやりながら、独自性を強めることを探していくのではないのでしょうか。他方で大きな政策課題はありますので、それをどう処理していくのかに注視して見ておかなければなりません。

**佐藤** 鈴木さんが知事候補として浮上した時、最初は多くの道議会議員に反対され、市町村長に反対されながらも当選して、政治的には強い力を持ったと言えそうです。確かに自民党が道議会の過半数を占めたので、従来であれば道議会の古参議員に言われたら逆らえないのでしょうか、反対

を押し切って立候補し、この結果が出たわけです。そうすると、道議会の古参議員に負けにくいぐらいの力を手に入れたと言えます。道庁人事についてもいろいろありますが、自民党会派とは関係なく知事としての人事ができるのではないのでしょうか。

**山下** わたしもそう感じるところがあつて、誰かの世話になつて出たわけではない、という感覚を持つていることは非常に大きい。今回の副知事人事に関しても、この人とこの人の言うことを聞いておかなければという人が少ない。無茶なことをしても、ある程度、文句を言いくいという状態をつくられていないのでしょうか。

鈴木さんは、困難なことがあつた時に立ち向かうのが自分の生き様と信じているようです。オーソドックスで、慎重なようにも見えますが、何かに挑戦する大胆な手法は意外に好きなのかなと思います。道庁内部でも「これを機に道庁が変わりたい」という声を聞きます。みんな様子見の状態でもあるのでしょうか、鈴木さんがそうした微妙な空気をどう生かすのかは見ていきたいと思えます。

**山本** 先ほども述べたように、上手く世論をつかんでいかないと厳しい立場になるでしょうが、おつしやるように最初はトップセールスで行くと思えます。この先には二つパターンがあつて、悲観的なシナリオだと高橋パターンでしょう。難しい問題はどんどん先送りし、権限がないことと、国の権威を盾に、道庁の意思を示さずJRやIRもそのままやってしまふ。

もう少し楽観的、希望的観測では、鈴木さんなりの独自の問題意識なり、改革をやつていく方法なのですが、何をアジェンダにしてやつていくのか全く見せないまま知事になつてしまつたので、このまま見せないで終つてしまふシナリオも考えられます。

まず、お手並み拝見なのでしょうが、全く何もせずに消えていくほど野心のない人とも思えませんが、そのうち「これ」というものを見つけて、打ち上げていくのかなと思えますが、今はそれが何なのかは分かりません。

**佐藤** これから見出すというのもあるかもしれませんがね。道庁の職員でもいわば古参の職員とは違う人たちが、夕張に派遣で来ていた人たちとのコネクションも使いながらというのも考えられますね。

### 地方政治の活性化・改革にむけて

**佐藤** 道政はこれくらいにしましょう。今回は自治体選挙の話ですから、市町村の話もしなければなりません。先ほども出ていましたが、無投票、なり手不足については自治体の首長や議員に魅力がないことも関係していること、ただし、魅力や争点のあるところは立候補者が出ていたということですが、魅力がないとか、あまりにも議員が出馬しないようなところはどうか、あまりにも首長について言えば、現職が強いわけですが。

**山崎** まず、首長で言えば、それぞれの自治体の固有の地域課題とどれだけ向き合うかではないでしょうか。向き合い方をどれだけ顕在化させることができるのか、あるいはそれを争点にできるのかのポイントだと思います。それぞれの自治体を個別にみても、地域医療をどうするか、学校をどうしていくか、地方創生もどうすすめていくかなど、いろいろな政策課題があります。それを顕在化していくのか、争点化していくのか、対処していくのかが必要になってきます。

もう一つは、小さい自治体でも住民対話を基本とする合意形成型の自治体運営をしているのかが重要ではないでしょうか。当たり前なことではあります。総合計画の運用についても、自治基本条例の実効的な運用についても、実行力を持った自治体運営を行えるか問われていくと思います。

**佐藤** しかし、首長が実行力ある自治体運営をすればするほど、争点がなくなつて、結局は選挙がなくなつてしまうのではないのでしょうか。

**山崎** 行政運営能力が高い首長で、多選化の傾向があるのはご指摘のとおりです。手堅い行政運営をしている首長さんにはそうした傾向がありますので、何とも言えない部分ですが、そうした首長でも四年に一度、住民から実績を問われる機会に直面することが必要ではないでしょうか。

**佐藤** 首長も人間ですから、体力的に持たなくなつてきたときにどうするのかなど、後継者づくりをしておかなければならないかと思えますが。

意識的に作るかと言われれば、難しい気がします。

**佐藤** 先ほどの話では市町村長は権力が無いということには、やることが無い＝権力が無いということになりますよね。権力者という意識を持つていないのではないかと考えてしまいますが。

**山崎** そこは説明の仕方が難しい部分です。今日の自治体運営は大変ではあるが、逆に大変であることを認識せず、昨日今日やってきたことを明日明後日も続けるように唯々諸々と自治体を運営するのであれば、権力者の座に居続けられるかもしれません。自治体運営であれば、ずっとやっていける仕組みでもあります。さらには議会のチェック、住民のチェックがなければ批判にさらされることもありません。どちらのパターンになっていくのかで変わると思います。

### 現行制度で出来ることは何か考える

**山崎** 議員に必要なのは自己改革だと思います。住民対話と情報公開、議会の意義、やりがいなどをやって不特定多数の住民に示し、認知、理解してもらえるか。そこをがんばっている議会が選挙になり、新人さんの当選につながっているのではないのでしょうか。

また、山本先生も言及されていたとおり、立候補条件の緩和や公職選挙法その他抜本的に見直していく必要はあると思います。例えば、公務員は出馬した場合、当選後に辞める、隣の自治体議員と兼職できる、議会活動の休暇取得を容易にできるようにす

る、被選挙権の引下げをするなど、いろいろなことがまだまだできるのではないのでしょうか。

あるいは、首長や市議会議員であれば供託金の引下げなど、トータルで見直していく必要があるでしょう。総務省の研究会で議論された少数専門型か多数参画型の議会ではなくて、現行制度を前提とした見直しの積み重ねが大事だということも強調したい。

さらには、住民自身も議員になったら想像した理解と一定の支援が必要です。例えば、報酬を増やすなども含め、住民が議会を理解した上で支えていくことを見据えていく。議会への住民の理解と参加を得なければ地方議会はやせ細り、衰えてしまうのではと考えています。

**山本** 地方政治の活性化は非常に難しいテーマです。わたしより若い政治学者の間では選挙制度に問題の焦点を当てて議論するというのが流行っています。総務省の研究会でもそうした報告書が出ておりますし、中選挙区や大選挙区的な選挙制度を見直すことを第一に据える研究者は多い。わたしも中選挙区制度が良くないことには同意しますが、選挙制度を変えれば、今、地方議会が抱えている課題が解決するかと言われれば、恐らくそうではないと思います。

確かに、選挙制度を変えると、候補者なり政党の行動が変わるだろうという前提がありますが、そもそもなり手がいないのに行動が変わるも変わらないかもしれません。そう考えれば、選挙制度を変えればいいのは都市部の発想で、北海道のよう

な地方ではあまり特効薬にならないのではないでしょう。つまり、選挙制度を変えるという議論と、地方議会を活性化させるという議論は必ずしも直線で結びつかないというのが最近の実感です。したがって、何をすべきという答えは見いだせません。なかなか候補者が出てこない話が繰り返されていますが、結局は採めたくないという話が前提にあるのではないのでしょうか。昔から決定的な対立に発展するような、しこりが残るような選挙戦にならないようにすべきという批判がありますが、人口が減るとそれがより深刻となりますので、特効薬は本当にないと思っています。

そもそも、対立しないことを前提に一生懸命利害の調整をしているので、対立を前提にしたしくみを当てるはめていくこと自体、無理なのかもしれません。さらに、町村総会も結局は二元代表制が前提となります。要するに、今の二元代表制が地方政治に必要、フィットするのも考えなければならぬということですね。具体的に何かこうすべきという考えがあるわけではないのですが、今のしくみを前提に考えることが無理になっていて、今後ますます無理になっていく可能性があるということ懸念するところですね。

ただ、山崎先生が指摘のようにやるべきことはたくさんあります。議会は昭和のシステムで、情報公開が紙であったり、ネットでの発信もようやく緒をついたばかりということもあって、やるだけのことをやってみれば、あと一〇年くらいは

延命できそうかなとも考えています。現状をよりよくしていくための試みは不断に続けていくべきですが、その先を考えると、現状のしくみ以外のあり方を模索しなければならぬのではないのでしょうか。

**佐藤** そうなると、枠組みの検討もある程度は必要だということですね。よく、新聞は選択肢がないと報道しますが、そうではなくて、そもそも枠組み自体に問題があるのではないかと思うのですが。

**山下** 今の話を聞いていて、まさにその通りと感じました。地方で不足しているのは議員や首長だけではなくて、あらゆる分野のなり手です。消防団のなり手がおらず、公務員が消防団になる例が増えていて。元々、消防団は非常勤の特別職の地方公務員ですから、地方公務員が別の地方公務員を兼務している状態です。災害が起きたときには自治体職員も仕事があるわけで、いざという時にどう行動するか、なかなか悩ましい問題も起きます。

民生委員の不足などもよく聞く話です。人口が少ない地域で民主主義をどう回すかは、現状のままで限界に近づいている。今の仕組みをどう変えていくのかは、都市の発想ではなく、現場をよく見て変えていくしかないのではないのでしょうか。世論喚起については、マスコミの立場から言うと、選挙になれば、大量に関連する報道をし、多くの人の関心を持ってもらいたいと思って新聞を作っているのですが、その新聞自体を読む人が

減っています。若者の新聞離れというのは以前から言われていましたが、読まない人の年齢層もどんどん上がっている。多くの若者はSNSといったソーシャルメディアなどで情報を得ていて、選挙があること自体を知らない人も結構いたようですね。

どのように選挙に関心を持ってもらえばいいのかは、昨今のメディア環境の変化を踏まえて、社会全体でもっとさまざまなことを考えなければならぬでしょう。

### 統一自治体選挙を再統一化する

**佐藤** 統一自治体選挙なのに統一率がどんどん下がってきて、うちのまちでは選挙がないのになぜ新聞では選挙を取り上げるのかという声はないのでしょうか。

**山下** そういう声もありますが、逆に言えば、そういうご指摘をされるのは、よく新聞を読まれている方です。それに対応する紙面づくりは真摯に考えていかなければなりません。読んでいない方々にどう振り向いてもらうかは悩ましいところですね。

**佐藤** 先ほどは統一選を前半と後半に分けず、一緒に行つてはどうかと話題になりましたが、元鳥取県知事、元総務大臣の片山善博氏は、統一自治体選挙を数年かけて再統一し、一月にやるべきだ。全国一斉にやれば選挙が盛り上げると言っていました。これはどうなのでしょう。選挙制度の改革もありますが、ほんの少しの制度改正

で済みませんが。

**山崎** それは悪いアイデアではないと思います。統一させるからといって、地方自治の独自性を阻害していると言えませんが、集権的な統制とまで言えないので、一つのアイデアとしてはあり得えますが、本質的な解決にはならないと思います。

**山本** 短期的にできることのひとつではあると思います。ただ、統一率は下がっていくものですし、三〇年先にこれで持っているかと言われる、難しいと思います。やはり、根本的な議論を先行して始めておかなければならない。総務省の一室の机上でいろいろ考えることも大事ですが、より深刻な問題が抜け落ちていないかと自戒しています。

**佐藤** 国政選挙の補欠選挙の時期は四月と一〇月にしました。一〇〇%一緒とは言わなくても、半分くらいなら考えられるのかなと思います。

### しがらみの少ないことを政治参加に生かす

**佐藤** 無投票を回避した自治体について、都市から移住してきている人たちはどう思っているのでしょうか。数は多くないと思いますが、議会に出て頑張ってみようかという人はいないのでしょ

**山崎** トータルではきちんと見ていませんが、個々のケースを見てみると、地域おこし協力隊だった人や、議会モニターだった人が議員になるケースが散見されます。

**佐藤** 今後増えていく展望はあるのでしょうか。

**山崎** それは魅力的な議会であれば、ということではないでしょうか。

**佐藤** わたしが出て魅力的な議会にするという人はいないのでしょ

**山崎** 小さい町であればあるほど、大変だと思っています。ある程度議会を改革していったら、関心を持って来てもらう。出やすい環境を作った上で新人さんが入ってくると考えています。やはり、風通しよく参加と公開をやっていくことが必要条件としてあるのではないのでしょうか。そういうことが全くなく、古い議会のままで、いきなり議員に出馬するのはちょっと難しいと思います。

**佐藤** わたしもそうですが、道外出身者は自分の地元の議員の活動や政治のしがらみを子どもながらに感じて育ったものです。これが北海道に来ると、あつけらかんとした感じが、青森以南の本州と比べれば強いしがらみは格段に少ないと思います。だからこそ、若い人が来たら、意外と出馬しやすいのではないかと考えているのですが。

**山本** 間接民主制が上手く機能する適正人数があると思います。数百人の人口規模で村を二分した選挙はそぐわない。一票差で当落した深刻な話となり兼ねない部分がありますので、議会制がどうなのかという疑問もあります。首長のなり手がない問題をどうするのか。ただ、北海道はしがらみが少ないのは間違いないと思います。

**山崎** 帯広市のような一定規模の自治体で言えば、佐藤先生が話されたことは当てはまると思

ます。今回では、帯広市以外にも先ほども話したように札幌市中央区や北区で浮動票狙いの政治参入がありましたので、今後はこうした動きがでてくるのかもしれない。

**佐藤** 人口の少ない自治体では難しいと。

**山崎** 人口一万人程度の自治体でも厳しいところはあるようです。

**佐藤** 若い人が来て定住し、働くことについては喜ばれるのかもしれませんが、自治体の政策決定過程に入るとなると、風向きは変わるのかもしれないですね。

自治体選挙の状況というのは、関心を持たれるように努力している自治体では選挙になりますが、山崎先生が話されていたように現状維持型のところは候補者を探すのも大変になってくるのではないのでしょうか。長い目で見ていけば、どう変化していくのか分かりませんが、少なくとも国政での野党の状況や評判がよくない・悪いという流れが自治体選挙にも影響を与えてきていることは、今回の統一地方選から見えてきました。

新しい知事も誕生しましたので、新知事の方向性、道議会との関係、その他の自治体では新たに選ばれた首長や議員たちの活躍に期待をしたいと思

います。長い時間の議論ありがとうございました。

本稿は二〇一九年五月九日に行った座談会をまとめたものです。 文責・編集部